

熱帯 バイオマス社会

調査報告

熱帯バイオマス社会における華人コミュニティの特徴に関する覚書：
クムナ・ジュラロン水系の調査から

市川 哲 1

サラワクにおける「ツバメの巣」ビジネスの特徴：
新たな技術の導入と持続可能な採集の試み

市川 哲 9

プロジェクト参加メンバー紹介 18

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (S)

東南アジア熱帯域における プランテーション型バイオマス社会の 総合的研究

ピントウルの華人墓地
(写真：市川 哲)



調査報告

熱帯バイオマス社会における華人コミュニティの特徴に関する覚書： クムナ・ジュラロン水系の調査から

市川 哲（立教大学 観光学部）

はじめに

本稿はマレーシア、サラワク州の河川上流域の華人コミュニティの特徴を、熱帯バイオマス社会における多民族状況という環境の中に位置づけて理解することを目的とする。この問題の理解のために、本稿ではサラワクの河川上流域における自然環境の中で華人がいかんしていかなる生業を営んできたのか、そして特に先住民との交流・通婚・ビジネスを通じていかんして自然環境と関わってきたのか、それにより彼ら彼女らのコミュニティをいかんして形作ってきたのか、という問題を調査・分析する必要があることについて議論する。それにより、「自然環境利用」と「先住民との社会関係」という観点から、熱帯バイオマス社会における華人社会の特徴の理解に関する覚書的な考察を行ってみたい。

本稿が採り上げるサラワク州には、西マレーシアの華人を対象としてきた先行研究が等閑視してきた特徴を持つ華人コミュニティが小規模ながら存在する。特にサラワク内陸部の河川上流域の華人は、西マレーシアとは異なる自然環境や多民族状況の中で数世代にわたり居住し、各種の生業に従事してきた。そのため本稿はこのサラワク特有の環境の中における華人コミュニティの多様性の一端を、ピントウル省のクムナ・ジュラロン水系の三つの都市の華人社会を採り上げ、簡潔にはあるがその特徴を紹介することにより考察することを試みる。

サラワクの華人社会の特徴と変容

華人はサラワクの民族集団の中では第二位の人口規模を誇るものの、圧倒的に人口が多い西マレーシアの華人社会と比較した場合、サラワクを含む東マレーシアの華人社会はマレーシア華人社会全体の中では周辺的な存在として位置付けられがちである。サラワクに

おける華人社会を対象とした先行研究の多くはブルック家による統治下での移住史や経済活動、各種社団の構成等をテーマとすることが多かった（e.g. Chin 1980, Kiu 1997, Lockerd 2003）。西マレーシアとは異なる多民族状況の下で華人がイバンやピダユ、オラン・ウル、マレーといった先住民との関係に言及する研究もあるが（e.g. Fidler 1978, King 1993, Ooi 1997, Lockerd 2003）、その多くは断片的な報告に留まっており、それがサラワクの華人コミュニティをいかに特徴付けているのかに関しては十分に明らかにされてこなかったように思われる。これに対し、T'ien（1997）や Chew（1990）、Fong（2008）による業績は歴史的な背景や当該地域の民族状況や生業形態に注目することにより、サラワクにおける華人社会の特徴を把握しようとした試みとして参考にするべき研究である。特に Chew（1990, 2000）は 19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのサラワクにおける華人の移住史を、河川流域の先住民と華人との森林産物の交易と、域外への輸出、ブルック王家による河川上流域の砦の建設等に伴う安定化の下での移住、といった観点から明らかにした点で、現在のサラワクにおける華人社会の背景を理解する上で示唆に富む研究である。また Fong（2008）はバラム川流域の華人社会の歴史について報告しているが、彼のように特定の都市の華人社会ではなく、特定の河川流域に点在する複数の華人コミュニティの変遷過程の調査という手法も、この地域の華人社会の特徴を理解するためには参考になると思われる。

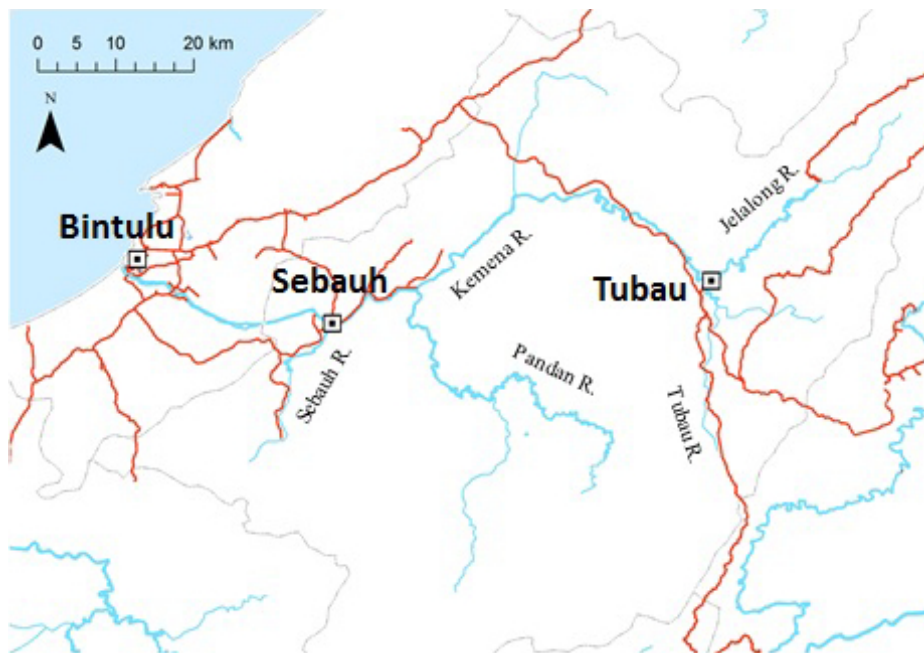
サラワクにおける華人の移住と定住の歴史は、19 世紀から 20 世紀中頃に至るまでのサラワク内陸部における移動手段および初期の華人の経済活動と密接な関係を持っている。伝統的にサラワクでは河川流域に先住民のロングハウスが建てられ、川の合流点にパサールが建設され、船による移動により、上流と下流、ロングハウスとパサール、先住民コミュニティと華人社会という異なる空間が結ばれる、というのが基本的な交易パターンであった。先住民はテツボクやラタン、香木、グタペルカやダマール等の各種樹脂、エンカバンの実、犀角や熊の胆、サイチョウ等各種の動物の角や毛皮や内臓、獣肉、ベゾアールストーン、ツバメの巣等、外

部社会で珍重される森林産物を収集してきた。華人はそれらの仲買人として先住民と交流することが多かったが、河川上流域の方がこれら森林産物の交易には地理的に都合がよかったのだと思われる。そのため華人はブルック家の統治初期から比較的河川上流域にも移住していたようである。筆者がこれまでサラワク各地で行ってきた現地の華人のファミリー・ヒストリー調査からも、断片的な情報に留まるものの、「河川下流域の都市への到来・定住→中流域への移動・定住→上流域への移動・定住」という、いわゆる「次第に上流に向かう移住」という「初めに上流に向かい、その後次第に下流に向かい定住する」という逆の流れが観察された（市川 2010）。

先住民との間の森林産物の取引は変遷を遂げながら現在までも形を変えて継続するが、第二次世界大戦後は次第に低調になる。かつて河川流域の先住民はボートによるバートレードのみならず、商品の購入や行政手続き、病院での治療、子供の就学等により河川上流域のパサールを定期的に訪れていたため、これらのパサールに居住する華人にもビジネスチャンスがあった。1960年代以降も下流から上流に移住する華人も存在した。特にサラワクにおける北カリマンタン共産党のゲリラ活動が盛んな時期には、夜間外出禁止

令や都市部での華人の社会経済活動への制限などにより、新たなビジネスチャンスを求め、下流域から上流域の小規模なパサールへと移り住む華人（特にシブ出身の福州系華人）が存在したようである。だが同時に、1960年代以降はサラワク各地で森林伐採が盛んになり、森林部や河川流域の各民族の社会も伐採企業での就労やそれに関連する生業が重要性を増した時期でもある。さらに近年ではアブラヤシ・プランテーションの一般化により、プランテーション会社での労働や、現地住民のアブラヤシ・スモール・ホルダーによる活動も主要な経済活動となってきている。

第二次世界大戦後の森林伐採の隆盛後も河川を交通手段とする生活は続くが、各種交通インフラの整備、特に内陸部における伐採道路の建設により、サラワク内陸部の交通手段は次第に河川中心から陸路中心へと変化した。ロッキング・ロードやプランテーション内部の道路、政府によって建設された舗装道路を用いることにより、もはや河川を利用せずとも陸路で下流や沿岸部の大都市に直接行けるようになったのである。それにより内陸部のビジネスチャンスは相対的に減少し、それに伴って次第に上流域のパサールの華人人口も減少するようになった。かつての河川上流域では一部の華人の中に「向山地・向上流移動」が見られたのだ



地図1: クムナ・ジュラロン水系と主要都市（出所：鮫島弘光氏作成）

とすれば、現在は「向都市・向幹線道路移動」が顕著になってきたと言えるのではないだろうか。

サラワクに限らずマレーシアの多くの地域では、地方都市や新村、遠隔地から大都市に就労・進学した人々が、春節や清明節等の特別な時期に帰村 (*balik kampung*) することが多いが、サラワク各地の河川上流域の華人コミュニティの中にも同様の現象が見られる。このようなサラワク華人の中には、特別な祭礼日に大都市にある家屋に集まってくる人々がいるだけでなく、かつては上流域のパサールの家屋に安置していた位牌を、大都市に住む他の家族成員の家屋に移したり、さらには上流域に設置した祖先の墓を掘り返し、遺骨を下流の大都市の華人墓地に埋葬し直したりする人々も出てくるようになった。そのため、サラワクに来た第一世代がかつて住んでいた上流のパサールには、その後

の世代は清明節やクリスマス等の特別な時期にも必ずしも戻らなくなるという現象も生じるようになった。

次にこのような河川流域における華人の社会史とその特徴の理解の一端として、クムナ・ジュラロン水系の華人が居住する主要な都市である、 Bintulu (Bintulu)、スバオ (Subauh)、トゥバオ (Tubau) の華人の生活を点描してみたい (地図 1 参照)。

ビントウル (Bintulu) の華人社会概況

ビントウルはクムナ川河口付近の人口約 20 万人のサラワク第四位の都市である。ビントウルに居住する華人たちの説明からは、ビントウルに到来した初期の華人は潮州系だったようでありであり、19 世紀末に現在でもビントウルの旧市街に存在する大伯公廟を建設し社会活動の中心としたとのことである。1960 年代以降になるとシブ、サリケイ、ビンタンゴール等の他の都市からビントウルに福州系華人が到来し人口を増加させるようになった。華人住民が増えた現在のビントウル市街地には、潮州公会や福州公会、福建公会、広東公会等の同郷会館のみならず、華人墓地や華語学校等が存在する。さらに近年はインドネシア (特に西カリマンタン州のポンティアナクやシンカワン) から華人系労働者が到来している。ビントウルではサラワクの他地域と同様、商店やフードコート等でインドネシア人労働者が働いているのを見かけるのが珍しくないが、そうしたインドネシア人労働者の中にはこれらインドネシア華人も含まれている。(写真 1、2)



写真 1: ビントウル福建公会



写真 2: ビントウル華人墓地

1960 年代までビントウルは小規模な都市であったが、かつての中国からの直接の移民のみならず、現在ではサラワクの他地域、およびインドネシアからのニューカマーの到来によりビントウルの華人人口は増加している。さらにビントウルはこの地域の森林伐採企業や天然ガス開発、工業団地といった経済活動の中心地であるだけでなく、歴史的にもクムナ・ジュラロン水系の森林産物の集積地であり、かつては水運会社も存在した。また現在では幹線道路や舗装道路・伐採道路を通じ、内陸部のコミュニティとも陸路で結ばれ、

クムナ・ジュラロン水系および周辺地域の華人の経済活動のみならず社会活動の中心地となっている。水運のみならず、陸路によっても内陸部やサラワク他地域と結ばれたビントゥルは、新たに流入する華人を絶えず呼び寄せているのである。



写真 3: スバオ遠景



写真 4: スバオショップハウス



写真 5: スバオ拿督公廟

スバオ（Sebauh）の華人社会概況

スバオはビントゥルからクムナ川を遡行した地点にある都市であり、Sebauh sub-district の中心地である。スバオにおける初期の華人はビントゥルと同様、潮州系であり、第二次世界大戦前から戦後にかけてクムナ川流域の先住民（イバンやカヤン、プナン（Punan））との森林産物取引に従事した。ビントゥルからクムナ川を遡ったところにあるスバオは、その周辺に先住民のロングハウスがいくつかあるため、戦前から居住する華人たちがボートやエンジン付きの船でロングハウスを訪問することにより森林産物取引に従事してきた。さらに 60 年代になるとサラワク他地域から福州系華人も到来し、スバオに定着し各種の経済活動に従事するようになる。スバオはクムナ・ジュラロン水系の他の都市や小規模パサールと同様、その成立期から 60 年代に至るまでは森林産物取引の拠点の一つであり、そうした経済活動を中心として各地から華人が到来し、コミュニティを形成していたようである。

だが筆者が基盤Sメンバーとともに 2010 年にスバオを訪問した際には、そのような経済活動はほとんど行われていなかった。現在のスバオにおける主要な経済は、観察した限りではスバオや周辺の住民を対象とした小売業や卸売業であるようだ。現在のスバオでもサラワクの伝統的な交易活動であった森林産物取引は他地域と同様、低調になっているようである。（写真3、4）

スバオには華人墓地が存在し現在も使用される。また当地の華人によって拿督公（Nadugong）の廟も建設されており、華人の宗教活動の中心となっている。これら宗教組織や墓地の存在は、スバオにおける華人コミュニティの規模と定着を意味しているのだと思われる。（写真5）

ただしスバオにはビントゥルと異なり、同郷会館や宗親会は存在しない。スバオの華人系住民が同郷会館や宗親会に参加したい場合は、

ビントゥルにある同郷者・同姓者の社団に所属する必要がある。華語学校も存在せず、スバオの華人生徒は基本的にマレー語を教育言語とする国民学校で学んでおり、中国語教育を受けることを希望する生徒はビントゥル等の外地の華語学校に進学する必要がある。またスバオではイバンやカヤンといった他の民族集団と華人との通婚も見られる。スバオの華人墓地の中には華人と結婚した先住民女性の墓や、華人と親族・姻族関係にある先住民の墓も存在する。スバオでは華人コミュニティが定着・形成される一方で、スバオ内部のみでは華人の各種社団の活動は完結していないのである。まだ伝統的な森林産物交易はほとんど行われていないものの、スバオにおける華人人口の相対的な少なさや、周辺に多数居住する先住民の存在により、華人・先住民両者の社会的関係は依然として密接なように見受けられる。(写真6、7)



写真 6: スバオ華人墓地入口



写真 7: スバオ現地住民墓碑

トゥバオ (Tubau) の華人社会概況

クムナ川は上流でトゥバオ川とジュラロン川に分岐する。トゥバオはこの分岐点に位置する木造のショップハウスとその周辺の小学校、政府機関、家屋群からなる小規模なパサールである。トゥバオのショップハウスで商店を経営するある華人は、現在約 30 人の華人がトゥバオに居住すると説明する。だがトゥバオの華人の多くはビントゥルやミリ、近隣の幹線道路沿いに家屋や商店を所有しながら、定期的にトゥバオを訪問し商店経営や家族訪問するという生活を送っている。またトゥバオには華人と先住民の親を持つ、いわゆる「混血者」が居住するため、正確な華人の人口は不明かつ流動的である。(写真8、9)

トゥバオの華人はパサールの近くの森の中に華人墓地进行を形成し、死者をそこに埋葬してきた。ただしトゥバオには現在に至るまで華語学校や同郷会館、同姓会は存在しない。華人寺院もなく、小規模な祠(大伯公)があるのみだが、これも 90 年代になり外部から新たに来た福州系華人が作ったものである。多くの華人を対象とする先行研究が指摘してきたような、華人は新たな移住先に各種の社団や寺廟を建設する、という現象はここでは見られない。(写真10)

クムナ流域の他の華人社会と同様、トゥバオに到来した初期の華人は潮州人と少数の福建人であった。ブルック家の統治下で第二次世界大戦以前から華人はジュラロン川とトゥバオ川の合流点に到来して居住し、上流に居住するカヤンやプナンといった先住民を訪問し、テツボク、ロタン、各種樹脂、エンカバン、各種工芸品(マットやカゴ)等を手入れし、逆にパサールからは衣類や食料、調味料等を上流もたらしていた。これら森林産物はクムナ川の船便で下流のビントゥルの華人企業にもたらされ、逆ルートで商品がトゥバオのパサールにもたらされた。さらに 1950 年代からはサラワクの他地域(現在のスリ・アマン省)から新たにイバンがこの地域に移住し、ジュラロン川やトゥバオ川上流にロングハウスを建設したり、他の先住民のロングハウスに婚入するようになった。

1970年代にはこの地域でも森林産物の取引は低調になったが、クムナ・ジュラロン水系での森林伐採は活発になった。当該水系でのこれら経済機会の増加・経済活動の活発化により、河川は主要な交通機関となった。この時期はビントウル・トゥバオ間を一日十便



写真 8: トゥバオ遠景



写真 9: トゥバオショップハウス



写真 10: トゥバオ大伯公

のエクスプレス。ボートが往復し、上流のロングハウスに居住する住民や伐採企業関係者は河川交通の要所であるトゥバオを頻繁に訪問・滞在し、そこで商品を購入していたとのことである。トゥバオにおけるビジネスチャンスの増大とともに、1960年代以降は他地域から福州系華人がトゥバオにも到来し、商店・飲食店・旅館の経営や林業関係企業で働くようになった。

だが90年代後半以降、次第に内陸部の幹線道路や林業企業による伐採道路が整備され、上流の先住民や林業企業関係者の交通手段が河川から陸路を中心になるに従い、クムナ・ジュラロン水系の最上流のパサールであるトゥバオを訪問する人々が減少するようになった。エクスプレス・ボートも2000年には運行を停止した。時を同じくして、トゥバオ川にはワニが戻って来るに至った。かつてエクスプレス・ボートの定期便や河川を往復するモーター・ボートの数が多かった時期には、頻繁な船の行き来や騒音によりジュラロン川からはワニはいなくなってしまうらしいが、往来する船の数が減ることにより、静かになったジュラロン川にはワニがまた戻ってきたのである。

また内陸部の生業としてアブラヤシ・プランテーションやアブラヤシ・スモール・ホルダーの活動が無視できなくなり、水路ではなく幹線道路の重要性が高まった。トゥバオでの経済機会の低下に従い、福州系華人もトゥバオを離れ、幹線道路沿いや他の大都市でのビジネスや居住に切り替えるようになった。ビントウルからトゥバオに至るまでの陸路はそれまで途中までしか舗装されていなかったが、2012年には完全に舗装された道路がトゥバオ・パサールが面する川の対岸にまで到達した。

トゥバオの華人社会は縮小化の一途をたどったが、流域の先住民との密接な関係や通婚等により、現在のトゥバオには依然として華人と先住民の両親を持つ人々が珍しくない。ただしこれらの人々を一義的に「混血華人」とみなすこ

とは、果たして現実を正確に反映しているかどうかは疑問である。彼ら彼女らの自己認識に関してはさらなる調査が必要とされる。

いずれにせよ、これらの「混血者」は春節や清明節には華人の親族・姻族の家屋に集まり、墓参・祖先祭祀・親族との交流等を行うが、その一方でクリスマスや収穫祭（Gawai）の時期には自己の双系出自をたどり、あるいは婚姻相手を頼ることにより、メンバーシップを主張できるロングハウスを訪問し、そこに滞在することも珍しくない。またロングハウスに自己の部屋を所有したり、ロングハウス周辺の土地を耕作して換金作物を植え、子供をロングハウスで育て自分は外地で働いたりする「混血者」もいる。

これらの「混血者」は父親が華人の場合は出生証明書の記載に従い華人として登録され、たいていの場合、華人的な姓を持つことになる。だが当事者からの説明によると、先住民コミュニティでは慣習に従い、これら「混血者」も双系的な関係をたどることによりロングハウスのメンバーとなり、ロングハウス周辺の土地を使用できるとのことである。

考察

クムナ・ジュラロン水系に点在する華人コミュニティを概観するだけでも、「大都市の社団や寺廟、華語学校を持つ典型的な華人社会」、「比較的小規模で自前の社団や華語学校がないコミュニティ」、「小規模な都市や遠隔地を離れ向都市移動や頻繁に移動する人々」、「華人・先住民コミュニティの双方に関係を持つ人々」、「先住民コミュニティに入ってゆく人々」といった多様なバリエーションが存在することが見て取れる。華人社会内部の多様性や居住形態の変化については既に多くの先行研究が指摘しており、クムナ・ジュラロン水系の事例のみが突出して多様性を示しているわけではない（Tan 2000）。だがこの地域の華人の多様性を理解するためには、本稿前半で指摘した、自然環境利用、先住民との関係、それによる華人コミュニティの多様化、という三点を視野に入れる必要があると思われる。

前述のようにこの地域では河川下流や沿岸部に華人が移住・定住し、その後上流に向かうという移動のみでなく、河川上流のロングハウス・コミュニティに近く、森林産物取引の要所である河川上流域に移住・定住し、その後、下流や大都市に再度移住するという流れも存在した。もちろん、この向上流移動や向山地移動のみがサラワクにおける華人の移住パターンであったわけではい。だがブルック家の統治下から第二次世界大戦後まで続いた、先住民と華人との取引ネットワークに基づく森林産物取引と戦後の森林伐採、およびかつてのサラワクの基本的な移動手段であった河川での船による交通が、当該水系における華人の居住地や居住パターンを決定したのが間違いなさそうである。しかし河川上流域という遠隔地では、森林産物の取引はともかく、華語学校や社団、寺廟の設立が困難である。そのため上流域の華人は外部のより大規模な華人社会の社団や学校、寺廟等をアウトソーシング的に使用する必要があった。この状況は、陸路の発達やアブラヤシ・プランテーションの重要性の増加に伴う経済的に重要な地域の変化、若年層の向大都市移動、ロングハウス住民の居住パターンの変化といった、いわゆる「流域社会から陸域社会へ」（祖田・石川 2013）というサラワク各地でみられる社会変化により、さらに変化した。現在の上流域の小規模な華人コミュニティの現状は、単なる未発達なコミュニティや低開発の結果と見なすよりも、自然環境利用の方法の変遷過程の結果であると理解するべきである。

また先住民コミュニティとの経済的・社会的に密接な関係や地理的な近接性は、華人と先住民との婚姻やそれに伴う「混血者」の誕生につながった。この先住民との密接な関係や「混血者」の誕生も、森林産物の取引や森林伐採、河川上流域での生活という華人を取り巻く自然環境利用の方法や地理的状況の産物である。他方、ロングハウス・コミュニティにおけるメンバーシップやそこの生活は、必ずしも華人コミュニティのそれとは抵触しないようであり、逆もまた然りである。サラワク州でも華人はブミプトラとしては認められず、「混血華人」も法的にはブミプトラとしては認定されないが、ロングハウスのコミュニティ内部の日常生活や慣習の領域では、華人の親・祖先をもつことは先住民コミュニティからの排除につながるわけではないようである。マレーシア華人、さらにはサラワク華人

の多様性を説明する場合、分析の枠組みを華人社会内部のみに限定して議論を進めるのは現実にそぐわない。

クムナ・ジュロン水系各地の事例で見られる、華人と自然環境との関わりは、熱帯バイオマス社会の特徴を理解する上での一つの視点になるように思われる。高度な生物多様性と豊富な生物量に依拠し、外部社会で珍重される生物資源の獲得や特定の作物の大規模栽培、そしてそれらの域外輸出に依拠した生活という特徴を持つ熱帯バイオマス社会においては、華人という中国系移民およびその子孫の生活も彼ら彼女らを取り巻く自然環境の特徴や他の民族集団との関わりから多大な影響を受けざるを得ないのである。都市の商業従事者として見做されがちであるサラワクの華人たちだが、彼女らの地域的多様性に注目することは、熱帯バイオマス社会の歴史的変遷や現代の特徴を理解するための一つの切り口になるのかもしれない。この地域における自然環境との関わりと、他民族集団との関わりという観点から、今後も熱帯バイオマス社会における華人社会の特徴について調査研究して行くことを計画している。

参考文献

- Chew, Daniel
1990 Chinese Pioneers on the Sarawak Frontier 1841-1941. Singapore: Oxford University Press.
2000 The Chinese in Sarawak: An Overview. In Lee Kam Hing & Tan Chee-Beng (eds.) The Chinese in Malaysia. Kuala Lumpur: Oxford University Press. pp.370-381.
- Chin, John
1980 The Sarawak Chinese. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Fidler, R. C.
1976 Sarawak and the Study of Plural Societies: An Outline. Sarawak Museum Journal. 24(5)173-184.
1978 Chinese-Iban Economic Symbiosis. Southeast Asian Journal of Social Science 6(1-2):56-77.
- Fong, Hon Kah (Translated by Juliatta Lim Shau Hua)
2008 A History of the Development of Baram River Basin in Sarawak. Kuching: The Sarawak Press.
- 市川哲 2010 年『『現地化』の多元性—マレーシア、サラワク州のある華人のファミリー・ヒストリーを事例として—』『白山人類学』(白山人類学会) 第13号、71-92頁。
- King, Victor T.
1993 The People of Borneo. Oxford and Cambridge: Blackwell Publishers.
- Kiu Mee Kuok
1997 The Diffusion of Foochow Settlement: In Sibuan-Batang Area Central Sarawak 1901-1970. Sibuan: Sarawak Chinese Cultural Association.
- Lockard, Craig A.
2003 Chinese Immigration and Society in Sarawak: 1868-1917. Sibuan: Sarawak Chinese Cultural Association.
- Ooi Keat Gin
1997 Of Free Trade and Native Interests: The Brookes and the Economic Development of Sarawak, 1841-1941. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- 祖田亮次・石川登
2013『流域社会から陸域社会へ：ジュロン川流域陸路走破の記録』『熱帯バイオマス社会』第14号、5-13頁。
- Tan Chee Beng
2000 Socio-Cultural Diversities and Identities. in Lee Kam Hing & Tan Chee-Beng (eds.) The Chinese in Malaysia. Oxford University Press. pp. 37-70.
- T'ien Ju-K'ang
1997 (1953) The Chinese of Sarawak: A Study of Social Structure. Kuching: The Sarawak Press (First published in London: Dept. of Anthropology, London School of Economics and Political Science).

サラワクにおける「ツバメの巣」ビジネスの特徴： 新たな技術の導入と持続可能な採集の試み

市川 哲（立教大学 観光学部）

はじめに

中華料理の高級食材「ツバメの巣」はサラワクの特産品の一つとして各地で販売されている¹。州都クチンでの華人商人に対する聞き取りによると、ツバメの巣の主な顧客は半島部マレーシアやシンガポール、香港、台湾、中華人民共和国といった中国文化圏の人びととのことであった。だがクチンやビントウル、ミリといった都市でツバメの巣を販売している商店に入って観察しても、ツバメの巣を購入している顧客を見ることは少ない。しかしこれらの店舗にはケースに入れられたツバメの巣が多数陳列されており、しかも値段も結構高い。小さなケースにはいった数個の巣に 500RM² 以上の値段がついていることもある。一体、誰がこのようなツバメの巣を購入するのか、ツバメの巣を売っている店舗は損をしていないのか、と不思議になる（写真1、2）。

またサラワクに居住する人々は、ツバメの巣を食べることはほとんどない。サラワクの華人の中にはツバメの巣を定期的に食べる者も存在するが、ツバメの巣自体の価格が高いため、日常的にツバメの巣を食べる華人は非常に少ない。またツバメの巣を食べるのは華人に限られ、先住民が食べることはまずない。

不思議に思い、ツバメの巣を販売するある店舗の関係者に聞いてみたところ、実は店頭で来客に巣を販売するだけでなく、マレーシアの他の地域やマレーシア国外へと輸出することが多いとのことであった。そのため、必ずしもサラワクにおける店頭販売だけがツバメの巣ビジネスなのではない。むしろサラワク域外への輸出の方が主流なのである。サラワクのツバメの巣の主な輸出先は香港や中国の各都市である。ツバメの巣はサ

ラワクをはじめ東南アジア各地では「中国文化圏向けの特産品」としての性格を持っているのである。

近年、この中華料理の高級食材の商業ネットワークに変化が生じている。この近年のネットワークの変化の大きな要因は、東南アジア全域で見られる、ツバメの巣を供給する地域における新たな技術の導入である。その新たな技術がもたらしたのは「洞窟でアナツバメの巣を採集する」という方法から、「人工的にアナツバメに巣をつくらせる」という方法への変化である。それにより、ツバメの巣の採集方法が変化したのみならず、サラワクにおける従来の民族間・地域間のネットワークの構造自体も変化した。近年のサラワク州におけるツバメの巣ビジネスの特徴とは、新たな技術の導入と、それによる高級食材ビジネスの変化だけに限られな



写真1：クチンで販売されているケース入りのツバメの巣。

（撮影：市川 哲）



写真2：クチンのレストランで提供されるツバメの巣を使用したデザート。一杯 50RM。

（撮影：市川 哲）

い。後述する新たな技術の導入は、生物多様性が高く、単位面積当たりの生物量が多く、さらに再生可能な生物資源の豊富な環境に依拠した生活を送る、いわゆる熱帯バイオマス社会における、民族関係や伝統的な交易ネットワーク、人々が志向する知識の性格や自然との関わり方等を変化させたのである。そのため本稿はこの近年のサラワクにおけるツバメの巣ビジネスの変化を、新たな技術の導入とそれがもたらした各種の社会的な変化という観点から報告する³。

伝統的なツバメの巣取引

サラワクに限らず、東南アジアでは伝統的に海岸部や内陸部の洞窟で先住民がツバメの巣を収集してきた。一般にアナツバメは石灰岩洞窟の中の岩壁のくぼみに唾液腺分泌物を用いて巣をつくる（写真3、4）。アナツバメはコウモリと同様、エコロケーションにより暗闇の中でも自己の位置や岩壁の位置を認識することができるため、洞窟の中でも飛び回ることが可能である。そのため伝統的なツバメの巣の採集方法は、特定の先住民が熱帯雨林の中に見つけ、所有している洞窟の中に入り、梯子や櫓を組んで設置し、壁面に作られた巣を暗闇の中で採集する、というものであった。

このようなアナツバメが営巣する洞窟の地理的な特徴や、洞窟内の暗闇の中での作業には誰もが従事できるわけではなかった。ツバメの巣の採集が可能なのは、熱帯雨林の中の洞窟の位置を知り、そこにたどり着くことができ、さらに洞窟の暗闇の中で梯子を用いたり櫓を組んだりできる先住民に限られていた。いかにツバメの巣が中国文化圏で珍重される高級食材だとはいえ、その採集・流通の「川上」である洞窟の中では華人・中国人は先住民たちに頼らざるを得ないのである。

このように熱帯雨林の洞窟で先住民によって採集されたツバメの巣は、他の先住民や華人のミドルマンによって購入され、さらに都市部に居住する仲買人（主に華人）に販売され、そこからさらに中国大陆の市場に輸出されてきた。いわばツバメの巣は東南アジア域内の民族集団や華人、お

よび中国や香港の中国人商人といった複数の地域間・民族集団間を経由する交易ネットワークの中で取引されてきたのである。

この複数の民族集団や地域集団の間でなされるツバメの巣の取引は、サラワク州に限らずボルネオ島各地の「伝統的」な交易ネットワークとも類似しているように見受けられる。ボルネオ島をはじめ、東南アジアでは比較的古い時代から中国やインド、中東、ヨーロッパといった外部世界で珍重される動植物が狩猟採集民や漂海民、焼畑耕作民等によって採集され、それらを他の焼畑耕作民や華人が仲介し、都市の華人や沿岸部のマレー人がそれらを購入し、さらに外部世界に輸出される、という流れが存在してきたが、ツバ



写真 3: アナツバメが営巣する洞窟の入り口（撮影：市川 哲）



写真 4: 洞窟内部。壁面のくぼみにアナツバメが営巣している。（撮影：市川 哲）

メの巣もこのようなボルネオ島諸社会と外部世界とを結ぶ交易ネットワークの中で取引されてきたのである。ただしボルネオ島の先住諸民族は基本的にツバメの巣を食用とすることは無く、完全に中国文化圏向けの商品としての性格を持っていた。

またサラワクの華人社会でも、ツバメの巣は高価なため、自己の健康のために消費することもあるが、日常的に消費する食材というよりも、むしろ特別な機会のための贈答品としての性格が強い。例えば入院患者や退院者、妊婦への見舞品、父の日や母の日の贈物などである。現地の人びとからの説明では、ツバメの巣は特に皮膚や咳等に効果があるため、特に高齢者や病気の人々に対するよいプレゼントになるとのことである。つまり必ずしも自分で食べるために買うとは限らないのである。

ではサラワクではいかにしてツバメの巣が取引されてきたのであろうか。サラワクに限らずボルネオ島各地では 1990 年代までは主に内陸部の洞窟にアナツバメが営巣したものを、洞窟を所有する先住民が採集することが一般的であった (Ismail 2002, Chiang 2011)。初期のツバメの巣収集では、洞窟内でアナツバメが抱卵・育児している最中でも先住民が巣を採集したため、過剰な採集により巣の収穫量が次第に減少することもあった。ただ持続的な採集方法が採られている地域も多い。現在でもツバメの巣を採集しているサラワクのタタウ省のカクスでは、洞窟は先住民プナン (Punan) が所有するが、採集は華人の仲介者が行い、決められた時期以外は巣を採らない、という持続的な採集方法も行われている⁴。

ツバメの巣の採集地は石灰岩の洞窟がある内陸部が中心であり、流通や消費に関わる華人たちは容易にそこまでは到達できなかった。直接アナツバメの巣を採集する先住民たちは洞窟内に営巣するアナツバメの活動や、洞窟内での採集技術に関する知識や技術を有していた。そのため現在でもサラワク各地で行われている伝統的なツバメの巣取引パターンには「洞窟の所有と

巣の採集は先住民」、「仲買・流通・精製は現地の華人」、「消費市場は中国」、という比較的明確な民族集団間・地域間の分業が見られるのである⁵。

新たな技術の導入

このように複数の民族集団間の分業により成り立ってきたツバメの巣取引だが、近年、新たな技術が導入されることにより多大な変化が生じるようになってきた。それが「ファーム・ハウス」(farm house)、や「バード・ハウス」(bird house)、中国語では「燕屋」(yan wu) と呼ばれる、倉庫のような外見の人工的な建物を建てたり、ショップハウスや雑居ビルの上層階を改造したりして、その内部に *Aerodrams Ficiphagus* を



写真 5: 倉庫型のファーム・ハウスの外見 (撮影：市川 哲)



写真 6: 雑居ビルの上層階を改築したファーム・ハウス。
(撮影：市川 哲)

呼び寄せ、巣をつくらせるという新技術である (Lim & Earl of Cranbrook 2002, Voon 2012) (写真5、6)。

人工的な建築物にアナツバメを呼び寄せ、その中で営巣させ、その巣を入手するというメソッドが、いつごろ、どこで確立されたのかに関しては、あまりよく分かっていないが、おそらくインドネシアではじめにこの技術が確立されたようである (Sankaran 2001, Jordan 2004)。少なくともサラワクでは 1990 年代にインドネシアからこのファーム・ハウスにツバメを呼び寄せるという技術が伝えられたようである。これに関しても明確な年代や、どこで誰がどのようにして導入したのかは、現時点でははっきりしない。だがこの技術に基づくツバメの巣ビジネスが一般化したのは 2000 年代になってからのようであり、特に 2010 年代以降、サラワクおよびマレーシア全域でファームと呼ばれるツバメの巣ビジネス (英語では farming business、中国語では「燕窩商」や「引燕業」と表現される) がブームともいえる活況を呈するようになった。

このツバメの巣ビジネスの特徴の一つは、ファーム・ハウスの所有者の大多数が華人であるということである。もちろん先住民が所有するハウスも存在はするが、その数は限られている。その理由はいくつか考えられるが、後述するようなハウスを建設し、内部の装備品を準備し、入手した巣を卸売業者に販売したり国外に輸出したりといった活動には多大な資金やビジネス・メソッドが必要とされ、それが可能なのは華人であることが多いからであると思われる。そのためインドネシアからもたらされたファームという新たな技術の導入により、現在のサラワクでは従来のように先住民が危険を冒して洞窟内でツバメの巣を採集し、それを華人が購入する、という方法ではなく、華人商人が中心となって自らアナツバメを建築物に呼び寄せ、安全かつ比較的持続的に巣を入手するという方法が確立されたのである。

だがこのファームという手法は、洞窟の中で巣を採集するという危険かつ困難な作業こそ必要とされないものの、伝統的な巣の採集方法と異なる努力をこのビジネスに参入する人々に課すことと

なった。それが、アナツバメの生態や、アナツバメが生息する自然環境に関する知識の追求と、それに基づく技術の開発である。

ファームではいかにして自己の建築物にアナツバメを呼び寄せ、その中に巣をつくらせるかが最も重要な問題となる。そのために、ファームに従事する華人商人たちは、いかにしてアナツバメを呼び寄せるかという知識を追及・洗練してきた⁶。これらの試みは多岐にわたる。例えばハウスの形態を工夫するだけでなく、ハウス内部の環境を整えることにより、呼び寄せたアナツバメを自分のハウス内部に定着させ営巣させることが試みられている。ある華人はハウスの室温は 28-29 度、湿度は 80-90 度が好ましいと説明する。パイナップルを半分に切って置いておくとよいと説明する者もい



写真 7: ファーム・ハウス内部のモニターに映し出された防犯カメラの画像。(撮影: 市川 哲)



写真 8: ファーム・ハウス内部に設置された、アナツバメの鳴き声を録音した媒体を再生するための装置。(撮影: 市川 哲)



写真 9: さまざまな外見のファーム・ハウス。このハウスは床面積が広く長屋のようにになっている。(撮影：市川 哲)



写真 10: さまざまな外見のファーム・ハウス。このハウスは入口を洞窟のように模している。(撮影：市川 哲)

る。またアナツバメが出入りするためのハウスの出入口の向きも工夫されている。アナツバメが出入りする入口は東側に向けてはいけな、アナツバメは朝、ハウスから出て採餌に出かけるが、その際に出入口に朝日が差し込むとアナツバメが嫌がるからだ、と説明する華人もいる。成鳥や雛、卵の天敵となったり害を及ぼしたりする猛禽類やネズミ、アリ、ゴキブリ等の駆除もなされる。こうしたメソッドの中でも最も重要なのが、アナツバメの鳴き声を録音した CD や DVD、MP3 等の媒体を使用し、鳴き声を流すことによりハウスにアナツバメを呼び寄せるという手法である。このアナツバメの鳴き声を録音した媒体は非常に重要視され、ハウスのオーナーの中には PC を用いて入手した媒体を編集

し、アナツバメが天敵を恐れている際の声声を削除し、巣を作っている際の声のみを残したものを使用する者も存在する。さらに現在、サラワクに限らずマレーシア各地にはアナツバメの鳴き声を録音した媒体や、拡声器、加湿器、スプリンクラー等、ファーム・ハウス関係の器材を販売する専門店も存在する。ツバメの巣ビジネスのための手引書や、ツバメの巣ビジネスのための業界誌（中国語）も販売されたり、ファーム・ハウスのセミナーまで開催されたりしている⁷。また他人のハウスに入り巣を盗む者がいるだけでなく、成功しているハウスのアナツバメを呼び寄せるメソッドを盗もうとする者もいるため、そうした人々が近づかないように見張るための防犯カメラを設置する場合もある（写真7、8、9、10）。

アナツバメを建物に呼び寄せるのに適した生態学的な立地も重要な問題である。現地では沿岸部の泥炭湿地林やプランテーションに建てられたファーム・ハウスはアナツバメを集めることに成功する傾向があるが、内陸部に建てられたファーム・ハウスではアナツバメを呼び寄せるのに失敗することが多いと説明する者が存在する。泥炭湿地林やプランテーションの周辺の生態学的環境は、前述のようにかつて洞窟で先住民が採集していた内陸部とは異なる。そのため新たにファーム・ハウスを開始する人々は、ハウス建設予定地で、あらかじめ録音したツバメの鳴き声を流し、ツバメがやって来るかどうかを確認する等、立地の調査も行っている。

このようなサラワクにおける現状は、それまでの「洞窟の所有・巣の採集は先住民」、「仲買・流通・販売は現地の華人」、「大規模な卸売や消費は中国文化圏」、という民族間・地域間分業から、「生産から流通、輸出までを現地の華人が行う」という状況が一般的になったことを意味する。いわば、新たな技術の導入は、従来の民族間・地域間ネットワークや自然環境利用方法の変化をもたらしたのである。

このようにして採集されたツバメの巣はそのままでは食用として用いることができず、様々な手順で精製す

表1 サラワクにおけるツバメの巣の単位価格		
巣の種類	加工前の 1 kg当たりの価格	加工後の 1 kg当たりの価格
洞窟のブラック・ネスト	2,000 ～ 2,500RM / 1 kg	5,000RM / 1 kg
洞窟のホワイト・ネスト	7,000 ～ 8,000RM / 1 kg	14,000RM / 1 kg
ハウスのホワイト・ネスト	5,000RM / 1 kg	6,000 ～ 7,000RM / 1 kg

* RM: Ringgit Malaysia. マレーシアの通貨

** 1RMは2014年時点で約33円（出所：現地での聞き取りをもとに筆者作成）

る必要がある。ツバメの巣には一般に羽毛や汚物が混入しているからである。サラワクにおけるツバメの巣は主にブラック・ネストとホワイト・ネストがある。ブラック・ネストは二種類の食用の巣を作るアナツバメの内の *Aerodrams Maximus* の巣であり、洞窟でのみ採集され、巣に羽毛等が混入しているため黒く見える（写真11、12）。ホワイト・ネストはもう一つの種類の *Aerodrams Ficiphagus* の巣であり、洞窟・ファーム・ハウス双方で採集でき、羽毛の混入が少ないため白く見える。ただ両者とも精製後は白色になる⁸。そして両者とも精製プロセスの過程を経ることにより、巣の価格も変化する（表1参照）。

一般にファーム・ハウス所有者は混入している羽毛や汚物を取り除き、型崩れした巣を特定の容器に入れ形を整える等の加工作業も行っている。例えばサラ



写真 11: 洞窟から採集された未加工のブラック・ネスト
（撮影：市川 哲）



写真 12: 巣を精製する女性たち（撮影：市川 哲）

ワク州の州都クチンのツバメの巣ビジネスを行うある華人ビジネスマンは、自己の工場の中に加工する場所を準備している。そこではマレーやピダユといった近隣住民の女性がプロセス作業に従事している。また人件費が安くプロセスの技術も優れた労働者が多いインドネシア側に巣の加工工場を設置し、インドネシア側で採れた巣のみならず、サラワクで採れた巣もそこに運び込み精製する華人ビジネスマンも存在する。ファーム・ハウスに関する知識と技術がインドネシアからマレーシアにもたらされたのと同様、マレーシア人によるツバメの巣採集や精製が、今度はインドネシア側で行われ、それによって得られた商品や資金がマレーシア側に流れる場合があるのである。さらにはこのようにして採集され、精製されたツバメの巣は、前述のようにサラワクの都市部の店舗で販売されるだけでなく、さらにそこから香港や中華人民共和国へと輸出される。このように、ツバメの巣取引には国境を越えた知識や技術、商品や資金の流れが存在するのである（写真13、14）。



写真 13: 香港、上環のツバメの巣販売店が集中する地域。
(撮影：市川 哲)



写真 14: 香港、上環で販売される東南アジア産のツバメの巣
(撮影：市川 哲)

おわりに

現在のサラワクにおける新たな技術の導入は、「ツバメの巣ブーム」という新たなビジネスを引き起こした以上に、これまでサラワクで存在してきた「伝統的」な民族間・地域間ネットワークに依拠する商品連鎖網を変容させている。これまで見てきたように、近年のサラワクにおけるファーム・ハウスに関する新たな技術・知識の導入は、ツバメの巣取引に従事する人々に対し、洞窟内部における巣の採用に関わる経験や技術だけでなく、いかにしてファーム・ハウスにアナツバメを呼び寄せるかという生態学的知識や科学的テクノロジーを求めるようになった。そして沿岸部の泥炭湿地林やプランテーションといったそれまでの洞窟のある内

陸部とは異なる地域でアナツバメを集め、営巣させるための知識や各種テクノロジーが重要視されるようになった。いわば現在のサラワクにおけるファーム・ハウスの知識や経験、技術の質は、それまでの洞窟で先住民が中心となって採集する場合の知識や経験、技術の質と根本的に異なっているのである。

このような近年のツバメの巣ビジネスに関する新たな知識と技術の重要性は、それまでの異なる地域集団や民族集団間の交易関係に必ずしも依拠する必要がなく、マニュアル・レイバーとしてサラワク先住民やインドネシア人労働者を雇用する以外には、基本的に華人社会内部でのみツバメの巣取引を行えるという状態をもたらした。だが 2011 年、中華人民共和国はマレーシア産ツバメの巣に含有されるとされる有害物質である硝酸塩の含有を理由に規制するようになり、香港や中国へのツバメの巣の輸出が困難になり、在庫を抱え値崩れに苦しむビジネスマンも出てきた。国際関係や有害物質に関する規制といった新たな要因も、ツバメの巣ビジネスという自然環境と高級食材トレードの商品連鎖に影響を与えているのが現状である (Chew 2013)。

アナツバメを檻の中で飼育するのでもなく、飼いは慣らすわけでもなく、その肉や卵、羽毛を利用するのでもなく、自然状態の中で生活するアナツバメに営巣する場所だけを準備し、育雛を終えた後の放棄された巣を採集するというツバメの巣ビジネスは、熱帯バイオマス社会における人々の生業という点から見ても、さらに動物と人間との関係という点から見ても、特に興味深い性格を持っている。そしてファーム・ハウスという新たな技術の導入は、在地の民族関係や伝統的な環境利用の形態を変化させている。だがその一方で、この技術によって得られたツバメの巣とは、熱帯バイオマス社会としてのサラワクにおける従来の森林産物やプランテーション作物と同様、基本的に外部世界向けの商品である部分で、従来の交易ネットワーク内で取引されてきた多くの商品と共通している。熱帯バイオマス社会の特徴を理解するためには、今後もサラワクおよびサラワクを越えた地域におけるツバメの巣ビジネスには注目する価値があるといえるだろう。

脚注

¹ 中国語で「燕窝」、英語では edible bird's nest、マレー語では sarang burung と表現される食用の巣をつくる鳥類は、日本語でいうツバメ (swallow) ではなく、アナツバメ (swiftlet) という生物学的に異なる種である。この中でもアマツバメ目アマツバメ科アナツバメ属の、*Aerodrams Maximus* と *Aerodrams Ficiphagus* の二種の唾液腺の分泌物により作られた巣が食用になる。「ツバメの巣」は中国では古い時代から貴重な食材として珍重され、唐代には食されていたと主張する研究者もいるが、本格的に中華料理に取り入れられたのは明代からのようである。だがツバメの巣は中国大陆ではほとんど産出されないため、主に東南アジアから輸入されてきた。サラワクもそうした産地の一つである (Lim & Earl of Cranbrook 2002, Jordan 2004, Chiang 2011, 専業燕窝商 2011)。

² RM (マレーシア・リンギット) は 2014 年 3 月の時点で約 33 円。

³ 現地調査は 2010 年から 2014 年にかけてサラワク州各地 (特にクチン、ピントウル、ミリ、スマタンといった都市部およびアサジャヤの農村部、クムナ・ジュラロン水系やバラム川、ラジャン川流域)、および中華人民共和国香港特別行政区で断続的に行われた。調査は基盤 S の複数のメンバーとの合同調査、および著者の単独調査の両方がなされた。

⁴ 2010 年 8 月の基盤 S メンバーとの合同調査で得た情報による。

⁵ ただし華人が全く都市部でのみ活動し、ツバメの巣の「川上」に相当する先住民居住地域や洞窟で活動していないわけではない。華人の中には自ら洞窟に入り時期を決めて持続可能な巣の採集を試みる者もいるが、この中には現地でサムセン (samseng) と呼ばれる華人系ギャングが内陸部にも進出し、巣の採集作業や流通に関与している場合もある。例えばサムセンはカクス地域の洞窟周辺でも活動し、先住民が所有する洞窟の周辺で、持続的な巣の収集や出荷にも関与するとともに、その利益の一部を受け取っているという状況も生じている (石川登先生からのご教示による)。ツバメの巣ビジネスは利益も大きく、また洞窟の所有権やハウスを建てるための土地の権利、流通や販売のメソッド等、イリーガル・ビジネスに従事する人々が参入する余地があることも否定できないのが現状である。

⁶ アナツバメをハウスに呼び寄せるための様々な工夫については Jordan (2004) や鈴木 (2013) が報告している。

⁷ このようなファーム・ハウスにアナツバメを呼び寄せるための試行錯誤としては、マレーシアのみならずインドネシア各地でも、建築物の構造やその内部環境の設定、さらには呪術師にアナツバメの呼び寄せを依頼するなど、様々な試みがなされている (Jordan 2004)。

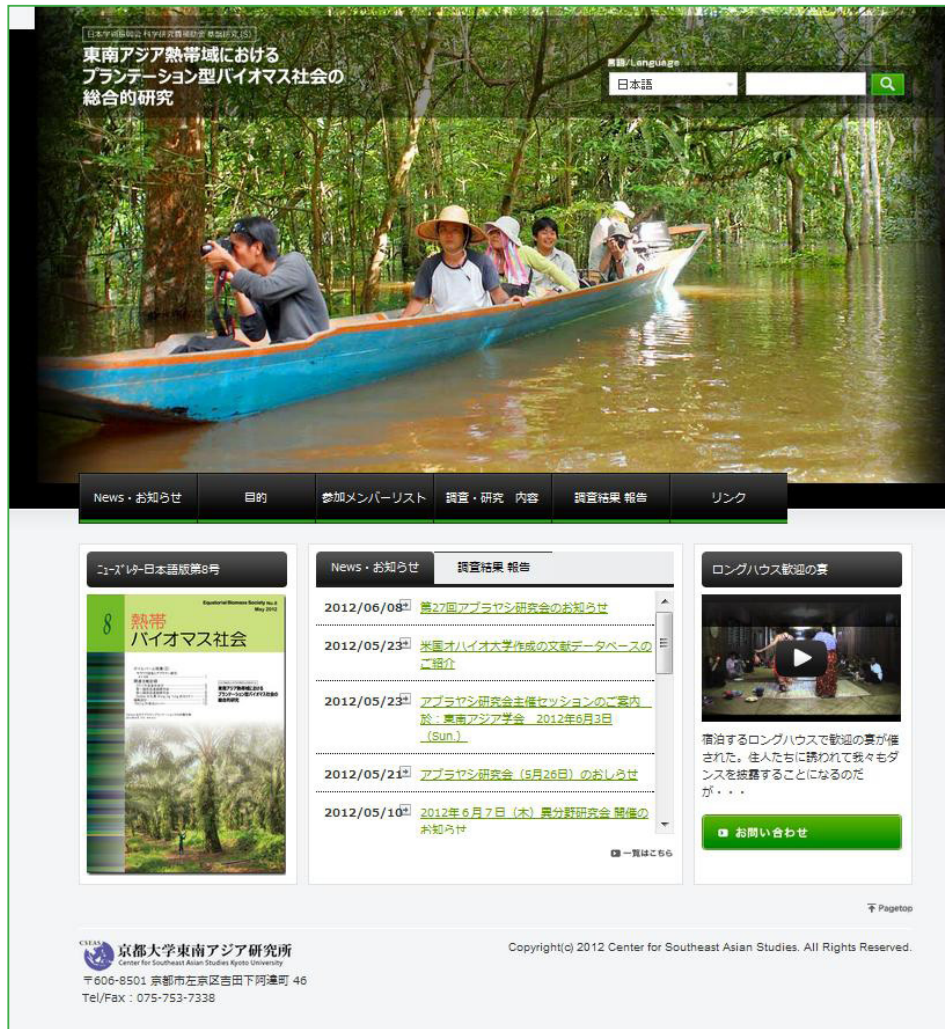
⁸ ただし洞窟産の巣の中には洞窟の壁面から巣に浸透した各種ミネラルのため黄色や赤色に変色するものもある。

参考文献

- Chew, Daniel
2013 The Edible Bird's Nest Commodity Chain between Sarawak and East Asia. *Equatorial Biomass Society* 7:1-6.
- Chiang, Bien
2011 Market Price, Labor Input, and Relation of Production in Sarawak's Edible Bird's Nest Trade. In Eric Tagliacozzo & Wen-Chin Chang (eds.)
2011 *Chinese Circulation: Capital, Commodities and Networks in Southeast Asia*. Durham and London: Duke University Press. pp. 407-431.
- Jordan, David
2004 Globalization and Bird's Nest Soup. *International Development Project Review* 26(1):97-110.
- Lim Chan Koon & Earl of Cranbrook
2002 *Swiftlets of Borneo: Builders of Edible Nests*. Natural History Publications
- Sankaran, R.
2001 The Status and Conservation of the Edible-nest Swiftlet (*Collocalia fuciphaga*) in the Andaman and Nicobar Islands. *Biological Conservation*. 97(3):283-294.
- 鈴木 通
2013 「ツバメの巣ビジネス成功の秘訣：ツバメを呼び寄せるハウスの建築より」『熱帯バイオマス社会』第 12 号、7 - 10 頁。
- 専業燕窝商 編著
2011 『燕窝大全』香港中藥聯商會有限公司。
- Voon Ping Kiong
2012 Bold Entrepreneurs and Uncommon Enterprises: The Malaysian Chinese Experience. *Malaysian Journal of Chinese Studies* 1:101-118.

本プロジェクトのホームページのご紹介

<http://biomasssociety.org>



当プロジェクトのホームページを開設しております。

- ・ メンバーによる調査報告
- ・ 講演会やワークショップ等、関連活動の紹介
- ・ ニュースレターのバックナンバー（英語版もあります）
- ・ 最新の活動などについても随時お知らせしております。

是非一度、ご覧ください。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原 薫	グローバル・ヒストリー	政策研究大学院大学
	水野 広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島 弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	首都大学東京 都市環境学部
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉 都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方 史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川 哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	日本エヌ・ユー・エス株式会社（JANUS）
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林 篤史	歴史学	政策研究大学院大学
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	国際林業研究センター
	Jason Hon	動物生態学	WWF マレーシア
	加藤 裕美	文化人類学	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田 淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野 雄一	河川生態学	九州大学 工学研究院
	竹内 やよい	生態学	国立環境研究所
	目代 邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：

(nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：

(<http://biomasssociety.org/>) で見るができますので、そちらの方もご参照ください。

(鮫島弘光)

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX: 075-753-7338
<http://biomasssociety.org>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀 (基盤S事務局)

香港で販売されるツバメの巣
(写真: 市川 哲)

